

近江商人

近江商人は、近江国（現在の滋賀県）の商人で、16 世紀から 19 世紀にかけて全国にその名を轟かせた。遠く離れた都市や町に企業を設立し、その鋭いビジネス感覚と勤勉さ、そして公正な取引の精神で高い評判を得た。また、明治時代の日本経済の近代化にも貢献し、彼らが興した事業の多くは、現在も活躍する企業へと発展した。彼らが築いた富は、近江八幡の旧市街に立ち並ぶ邸宅に反映されている。

近江商人の成功は、その地理的条件にも起因している。近江は政治の中心地である京都と商業の中心地である大阪の両方に近かった。また、江戸と京都を結ぶ中山道と東海道のルート上でもあった。近江では 12 世紀以降、比較的広く交易が行われていたと考えられているが、近江商人が本格的に台頭するのは 16 世紀、戦国武将の織田信長（1534-1582）が始めた自由貿易政策がきっかけである。信長は 1576 年、近江の権力の中心地として安土城を築かせ、その下に町をつくった。信長は安土に商人を集めるため、既存のギルド「座」とはわかれず、かなりの自由度をもって、「楽市楽座」と呼ばれる制度で商人の活動を奨励した。1582 年、信長は殺され、安土城は廃城となった。しかし別の武将、豊臣秀次（1568-1595）は 1585 年に八幡山に城を築き、その下に八幡町（現在の近江八幡）を作った。彼は安土商人を八幡に招き、信長の自由貿易政策を継続させた。

10 年後、秀次は亡くなり、城は廃墟となったが、自由貿易制度は近江国中に広がり、商業ブームを促進させた。この時期に栄えた近江商人は、他地域へも活躍の場を広げ始めた。近江の各地域の商人は、その地域特有の品物を取引し、各地域で活躍した。八幡商人は、蚊帳や畳表、麻布製品などを扱う商人だった。1600 年代初頭、徳川幕府が開かれ、事実上の首都となった江戸にいち早く出店し、蝦夷地（北海道）の開発にも携わった。徳川幕府が外国渡航を禁止する以前は、シャム（タイ）やアンナン（ベトナム）まで足を伸ばした八幡商人もいた。

近江商人の典型的なイメージは、円錐形の帽子をかぶり、長いマントを着て、肩に長い棒を担いで品物を運ぶ行商人である。近江商人は、このように日本全国を旅して商品を売り歩いて、商売を始めた。安定した需要を醸成し、人気のある商品は注文を受けてから調達した。そして、十分な資金が貯まると、常設の店舗を開き、成功した商人は大都市に店舗網を持つようになったのである。

近江商人が成功したもう一つの要因は、商人としての倫理観の強さである。商売している地域の部外者として、彼らはしばしば疑いの目で扱われた。また、江戸社会では、商人は何も生産しない最下層に位置する存在であるため、一般的な偏見にさらされることもあった。そのため、商人たちは誠実な商いによって信用を得るとともに、商圏の産業を積極的に奨励し、地域の人々に受け入れられていった。近江商人は、勤勉、儉約、公正な取引を信条とし、そのビジネス哲学を示すいくつかの原則

を持っていた。これらの原則は世代から世代へと受け継がれ、家業を永続させるための基本的な考え方とされた。例えば、「始末して気張る」という意味の「節約努力」は、今あるものを最大限に活用し、努力することが長期的なビジネスの成功につながるという商人たちの信念を表している。また、近江商人の代表的な言葉に「三方よし」という言葉がある。これは、どんな取引も売り手よし、買い手よし、そして社会全体のためになるものでなければならないという意味である。

近江商人は、自分たちのためだけでなく、公共の利益のために働く事を重要視していたのである。この精神は「隠徳善事」という言葉に表れている。近江商人にとって、儲けた利益は自分のためだけでなく、世間に大きな声で言わずに富を分かち合うことが重要だったのだ。その社会貢献は、学校、道路、橋などの公共事業への資金提供や、神社仏閣への寄進といった形で行われた。